であつた。

箱から出して表紙を見る、中澤氏の意匠で、雪の山と雲の塊まりとが模様化されてある、『日本アルプス』といふ點から採つた材料はよいが、色の調子が神秘的で無いと思つた、それに反して、背の意匠は大に氣に入つた、雲と星、高山植物、たゞそれだけが簡潔に自然の一部を現はしてゐた、これは中村清太郎氏の考案で、文字も同氏の筆蹟である、若い人の伸々とした心持が見えて嬉しい。厚い表紙を開くと所謂見返しで、杉浦君の手に成つた、雪白の雷鳥と高山植物が、金と綠で紫紺色の上に浮むでゐる、高潔といふ感じでなく、少しく重苦しい印象で、お召の裾模様を聯想させた、最も印刷の出來も惡かつたと斷り書はあるが。扉繪は中澤氏の筆、慾にはも少しサツパリさしたい。第一圖版の高野氏の日本アルプスの寫眞は、開卷以來稍や濃艶の色に飽いた目をして、俄かに清涼の氣を感ぜしめた、壯嚴、雄大、崇高などの文字を頻りに並べたくなる。本文の『箱根山中より』以下は、讀む事は後にして、手は直ちに第二第三圖と、繪の上にのみ走る。中村氏の『須走途上』は面白いスケツチで、略畫ではあるが、充分其土地を想像させるに足りやう。茨木君の『山中湖畔の宿』は、色が旨く出てゐない、むしろ一色畫の方がよくはないか。第四圖版の『雨雲の富士』は、自分の作で、バラ〳〵雨の降る中に富士の中腹が見えたので、急いで寫生したものだが、一部分を區劃して寫したもので、何となく畫面に旨く入つてゐない、次の茨城君の『本栖村』は水彩の三色版で、私も曾て同じ位置で寫生したことがある、平板で色が冷たいが、ゴツ〳〵した筆致は、場處と相應して面白い。第十四版の『越中劍山』は、中村清太郎氏の油繪原色版で、繪具が少し粘つてはゐるが、高山の印象は充分受け入るゝことの出來る繪である。其他圖中の寫眞は、二三を除いては、孰れもよく繪畫的の位置を捕へてあつて、山好きの人達をして、身慄ひさせずには置まい。

一わたり見て、更にまた初めより見返した、そして烏水氏の鋭い文章は、此書の裝釘とはあまり共通の點を見出さなかつた、そして若し私の希望を有體に言はせるなら、表紙に、見返しに、扉繪に、あのやうな工風した意匠を加ふることなく、もつと簡潔に、も少しクラシツクに裝ふたなら、日本アルプスは、一段の崇高と神秘とを增すであらうと考へた。（七月二十六日）

松江にて

城山公園へ往つて見ると、到る處にお茶屋があつて、名物櫻餅の旗が風に飜へつてゐる。大道といはず、樹の下といはず、芝の上にも、家の蔭にも、三脚を据へて、連中は頻りに筆を動かしてゐる。眞向から夏の日に照りつけられて、平氣でゐるのもあれば、日蔭に居ながら、扇遣ひの忙はしいのもある。やさしい積りで取掛かつて、存外むづかしいのに閉口してゐるのもあれば、思ひのほかよく出來たので、頗る得意でゐるのもある。さま〴〵で面白い。